

会報6号に書かれた、山野辺義雄氏の「見て描くことから見ないで創ることへ」は大変重要な提案である。「版画教育雑感」と言う形で書かれているが、私達は日常、作家として教師として多くの雑感としての未整理なものを抱いている「デッサンをすれば画家になれるのか」これは先般の学園紛争時によく聞かれた言葉である。それほど強烈な問いかけでなくとも、山野辺氏の言う、「自分の今まで勉強してきた事柄と版画とが仲々結びつかないで困惑している状態」を私もしばしば経験する。描写力の少しでも生かされる、リト・銅版はいくらか良いが、木版となるとまったくその断層に立ち迷うことになる。私は木版の導入として、版材にプラスする方法と、マイナスする方法、平版なままの三つに分けた説明をして、マチエルの表現による試作をさせ、その中でもっとも興味を引くマチエルを使って表現することで制作への糸口としている。両角修君の釘による表現は成功した例である。版画でなくとも3年になって、抽象表現に入る学生も自分の考えて、表現された作品との断層で立ち迷っている。ただ、裸婦や静物と描写行意を続ける学生だけがあまり迷うことなく卒業時まで行くことができる、このことは現在の美術大学の教育体系が描写による方法論しか持ち合せていないことを意味する。故にデッサンをすれば画家になりうるのか？と言う問となる。かつては描写力を養うことで画家たり得た部分もあったが、今日のごとく多様化された表現の基礎を養うとすれば、描写力と言う単一な体系だけでは多くの要求を満たし得ない。1969年頃の学園紛争は古い単一な教育体系を脱ぎ捨て、新しい体系を求めて苦悩した渇きであったと見るが、混乱だけを残して終ってしまったのは本当に残念である。ただいくつかの提案や指針は残した。

石膏デッサン1本であった入試の方法にも漸次鉛筆デッサンや自由な構想が持ち込まれるようになったのもその一つである。

美術大学の入試であるから、当然、手と目の訓練があつて良いがそれのみと言うのでなく、構成力、想像力、色感等々いくつかの要素に分けて、その資質を見つけたすのが当然だが。果して、入学後、その資質を十分に伸ばし得る多様なカリキュラムが用意されているだろうか、入試の方法に少々の変化があつても大学の内容が変わっていなければ実態は何も変わっていないことになる。

変革の動きを受けて、もっとも前向きに今日の要求に努力と発展を試みて来たのは版画である。

多くの美術大学の版画が選択から専攻に変わり飛躍的な発展を見て、従来の木版、石版、銅版と言った決った版種だけの技術的修練に終止することから、もっと巾広く拓刷りやブリンティングと自由な表現の世界を身につけることも考えなければならぬ時点に来ている。職人的な部分から、手と目の思索による、自由で豊かな表現のふくらみを持たすべきである。

現に木版とエッチングと言った版種の併用、新しい版表現の発見を試みる学生も多くなった。そのことは、描写力、構成力と言った表現技術をも含めて、より深い内面にまでかかわる、カリキュラムを組み得る可能性を持っているように思う。われわれは「大学版画研究会カリキュラム案」の次の肉着けとして、現場の一つ一つの雑感を討議整理し、具体的な方法論を作り上げなければならない。

もっとも新しい、現代的メディアを持つ版画であるからこそ、今日必要としている美術大学の新しい教育体系を引き出す糸口となりうる、山野辺氏の提案はその重要な部分を提示している。

東京芸大における版画研究室改組拡充の問題点

中林忠良

国立大学における教育機構の改組および施設の拡充、教官増員等に関する要求は、すべて学内の意志統一（教授会の意向）のもとに、文部省の認可を得て実施される。これが概算要求と呼ばれるものである。ところで文部省の認可というのは、当然のことながら時の行政そのものであるから、現行の政策や条例の規制を受けざるを得ない。そのもっとも大きなものは文部省による大学の人員削減政策であり、東京都の学生定員増が引き起す人口流入制限の条件であり、敷地面積に対する大学設置規準や公園緑地条例等である。

東京芸大版画研究室は、過去15年間にわたって講座増設（現在は講座制を廃しているため、教官増員と共通工房の機能をもつ施設拡充）の概算要求を続けて来た。そして今年度、学内の賛意を得て美術学部概算要求の最上位懸案事項に加えられるまでになった。しかし要求を具体化してゆく中で、この要求が上記制限の前で非常に困難であり、根本的なところでの修正をすることなくしては成り立ちにくいことが明らかになってきた。

大学における人員削減政策は、現在のところもっぱら事務系職員の範囲内で実施されていて、教官にまではおよんでいないが、この大前提の前に教官増員はほとんど可能性がない状況である。また一教官の増員は通常5ないし10名の学生定員増に継がるので、都条例にも引っかかってくる。また上野公園内に位置する芸大の敷地は、4階建て以上の建築が作れない地域であり、芸大の持つ狭小な敷地はあとわずかの余裕を残してすでに建築基準の限界にきている。仮りに芸大において、油画専攻と並ぶ（油画科と通常呼ばれているが、絵画科の中の油画専攻である）版画専攻を設け、基礎課程（学部1・2年）の独立した教育を受け持つとすれば、少なくともあと3名の教官増員と技官

の新設、それに約1,500m²の実習室増設が必要となってくる。現在のところ版画的な要求は大きな困難に直面しているといわざるを得ないのである。

そこで考えられてきたのが、センターあるいは附置研究所方式である。これは在来の大学機構に附属する機関であるため、前述の規制を受けないですむと考えられるからである。現在の版画研究室を閉じて版画センター一本でゆくという構想をとれば、芸大にも教官増員の道は開かれてくと思われる。しかしこの版画センターは研究施設の外、工房を美術学部解放、使用希望者に初歩的な技術を指導するというだけのものであって、専門教育機関ではないために版画プロパーの学生を抱えることができないというものである。つまり版画を専門にしたいという学生は、油画なり日本画専攻に籍を置きその都度センターへおもむくという形が想定される。

会員諸兄は、カリキュラム分科会における版画教育の理想的な位置づけを、版画センターであるとした報告書を記憶されていることと思う。それは3つの柱を内容としたものであった。すなわち1. 版画プロパーの教育と研究機能 2. 共通工房としての開かれた基礎教育機能 3. 大学外にまで開かれた研究機能である。これは1の機能を中心にしてそれを充実発展させることにより、他の機能の効果を上げんとしたものであった。文部省が認可するセンターが、この1の機能ははずすことによって成り立つ種類のものであるならば、それは果してわが国の版画教育の質的向上に継がるものとなり得るであろうか。ここのところで芸大は今、重大な問題を抱えていると言ってよい。何にも増して社会のコンセンサスの高まりが望まれる所以である。

カリキュラム案と実際

各大学においてそれぞれの形体と方法、内容によって行なわれている版画教育は版画の技術、技法に関しては従来からのそれなりの方法である程度成し得ていると思う。入学受験期のデッサン、油絵等、入学後の2年間そして版画専門の2年間へと版画プロパーとして考えてみるならば版画と広い基礎的造形教育とのつながりにおいてまだ内容的に検討されなければならない問題が多々あるように思われる。版画を大きな意味で絵画として捉えるとき技術偏重に落ちいらない本当の表現方法として考えるならばその基盤となるべき実技期間と版画専門となる間に第1段階としてのカリキュラム案はまだメスを入れてない気がする。このことは版画プロパーの形体をとらない版画コースの場合でもあてはまる。カリキュラム案は指導に当って、実技内容によっては油画担当者と提携して行なうとなっているがその実技内容の具体的な面がはっきりしないため、油画の中に属している版画でもその提携の方法も定まらない点がある。各々の立場で基礎実技を行ないそこから選択によって版画コースに移り、初歩から版画を始める。版画のプロセスはわかっても描写を主とした課題や自由制作等によって養ってきた力を版画の制作を通して自由に自己の表現へとつなげていくには幾多の試行錯誤と工夫を繰り返さなければならない。そこでは版の持つ独自性が各自の表現の問題を方法の違いだけですりかわただけで終ってしまうこともあるし版画についての浅い経験からくる知識により自分の表現を安易なところで考えてしまうこともある。また以外な抵抗感にあって漸新な表現への発展へとつながることもあるだろう。カリキュラム案は作成した時の状況を考えると各々の大学で現実に行なわれていたものを基に必要と思われる部分を加え形を整えたものであり、

田村文雄

全体を一つとしてみれば版画科カリキュラムと成り得るといえる。次にくる問題としてこの形体に具なう運営の具体的な諸問題や入学後の基礎実技内容とそれを版画として如何に表現に結びつけていくつながりを具体的内容の検討によって進めていくことが重要な点である。

女子美術大学においてカリキュラム案を下敷にしたカリキュラムにより4年間が経過したわけだが版画プロパー第1期生を送り出した現在も不十分な点ばかりが多く反省している。カリキュラム案と実際上の問題点を以下二、三述べてみる。

油画との提携は実習内容の点と時間的な面など難しい点があり、行なわれていない。入学試験はまがりなりにも独自の方法がとれるが編入については単位とのからみで女子美において不可能であった。その他版画史、印刷概論等のレクチャー、印刷概論は内容範囲などで検討中である。4年間のカリキュラムは案の最初の課題として銅版画実習が起きているが基本的には良いと思うがその内容が問題であった。銅版画の媒体をかりてドライポイント、エッチングによる自画像と限定してデッサンをする一版画のプロセスを利用して素描力を養うことに主眼を置いて行なっているがこれも最良の方法であるのかといつも疑問が残る。またカリキュラム案は素描、着色基礎実技と版画の基礎技術の習得を目指して2年間に相互に行なうので最初に取り組んだものも始めての人達が多いため次のときに忘れてしまい、またはっきり日程が分かれているため別々の意識で入るため各々の習得したものの流れがうまくいかない面があり毎年状態をみながら工夫をこらしている。今年度はドライポイントなどを素描の中に取り入れ版をもって直接視て描かせたものを次の期間で銅版画の他の技法を使わせながら視ないで完成させるなど苦心している。

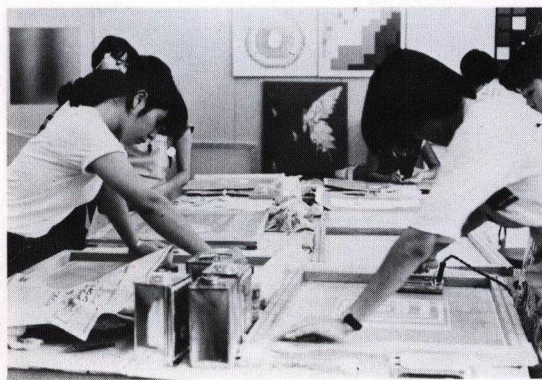


版画とタブローの課題

渡辺達正

多摩美の版画実習は3年より必修選択として行なわれている。1年、2年は基礎デッサンと油彩の実技実習である。3年になって版画を専攻してくるほとんどの学生は版画の彫り、描画、刷りの技術的な知識は持っていない。だから4月より始める銅版、木版、石版の基礎実習を通して版による表現の世界を知ることになる。この期間は3週間単位で、9週間であるから銅版なり木版を追求するには時間が短かすぎる。この短い期間は、当然、技術的な指導に使われてしまい、講評会の後は夏期休暇に入ってしまう。このため前期の技術的な実習を考えて夏期休暇の課題を出題している。

■ 昨年はエスキースと油彩画だったと思う、以前は版画の出題もあったように記憶している。毎年少しづつ違う出題のされ方をして油彩画は必ず入っている。エスキース等は前期受けた版画の表現方法を入れて描画することと補足され、9月実習に入ってすぐに版画の制作を始められるようにと出題されている。油彩画の課題は、平素の実習時間帯に入れることができないためだ。(3年、4年次の2年間ではとてもカリキュラムの中に組むことはできない。)と言っても夏期課題の油彩も、エスキースも、3年の夏休みだけで、4年次は教職科目を取っている学生が多いので、前期の実技実習は閑散としてしまう日が続く。(教員採用試験のため7月から9月頃まで制作どころではないようだ。)この2年間で1回だけの油彩画の課題は9月の講評会に提出されてくる。この時感じるの素材が違って、ほとんどの学生に油彩画と版画の間に共通のイメージを見ることができることだ。力作を提出する学生もいるが、もう油彩画は描かないと、作品を持ってこない学生がでる。



常葉短期大学

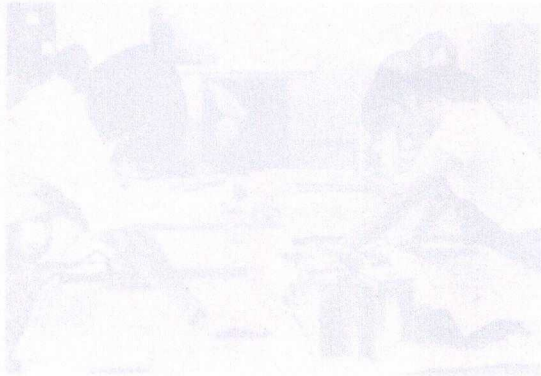
坂田和之

本学の実美術・デザイン科は、静岡の東名高速菊川インター近くにある。総合短大の一つの科として、昭和47年に開設された。現在、絵画・彫刻コース、デザインコース(ヴィジュアル、インテリア・プロダクト、アパレル)があり、専門家育成を目的として入学時より選択している。本科のみ男女共学で現在学生数は合計120名である。

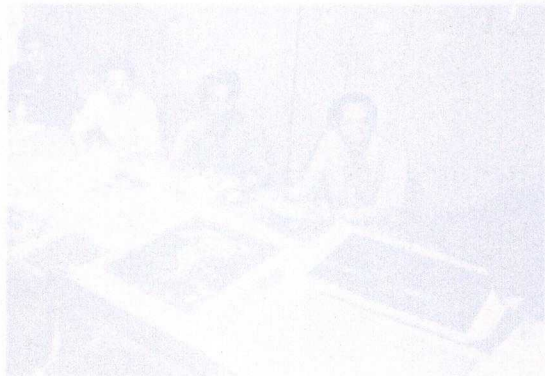
本科では当初より独立した版画コースの設定はなく、昭和47年～53年まで選択として集中実技を行なって来たが(木版・城所祥氏、シルク・清水昭八氏)、現在は版画スタッフ等の問題もあり、デザイン関係でのシルクスクリーン((表現技術)を行なっているに過ぎないのが現状である。また、工房はあるが版画設備が窮めて不備な為、今のところシルクスクリーン、木版が精いっぱいというのが悩みとなっている。

4年と違い2年の短期で版画を考えれば、いろいろな問題が残るが、幸い本学付属高校に美術科があり、本年度より版画(銅版)を取り入れ、2・3年は全員履修する様になった。それをふまえ、今後大学として、その延長上で重要視してカリキュラム改正を進行中である。絵画としてその表現領域の可能性を追求すべく版画を再確認し、定着させるべき時期である様だ。

■ 尚、本学キャンパス内に美術館を持ち、(464m²)年2回(春・秋)の企画展と作品収集を行なっている。常設に版画ではアアントニー・クラヴェ、ハンス・エルニー、マリノ・マリーニ、サルバドル・ダリ、シャガール、ミロ、ピカソ等々があり約70点程である。国内作家の作品も含め、野外彫刻、素描、油彩画、等は学内に於いて刺激となっている。本科は更に内容の充実という意味から、単に版画という一分野でなく広い視野から検討する必要を痛切に感じている。



左：中央美術学院の講義風景（1980年）



右：中央美術学院の講義風景（1980年）

5月中旬に機会があって、北京の中央美術学院で色彩木版の技術の集中講義を行ない、その間に中国の版画家や教育に触れたので、その一端を紹介したいと思う。

中央美術学院は現在の中国の最高の美術専門学校である。北京市の中心部に近い校尉胡同にあり、元日本人小学校の校舎を利用している。建物は古く狭いがテレビを利用して講義ができる設備もあり、中味はなかなか近代的である。

今年は創立30周年になるが、文革中はほとんど閉鎖同様だったそうである。今年は何かの理由で学生を募集しなかったもので、4年制だが現在の学生は3年と2年だけで100名、うち版画科の学生は32名である。その中に数名の女子学生も含まれている。それに対して教員総数は200名で、うち版画科の教員は18名ということだった。

実技部門には油絵、中国画、版画、彫刻の各科があり、学術部門には美術史科がある。実技部門でも学課として政治科目、中国語、外国語、文芸理論があるということだった。

版画科には木版、銅版、石版があるが、設備はまだ充分ではない。木版を専攻する学生が多いということだった。

私が意外でもあり予期せぬ幸運と思ったのは、中央美術学院の主な教授がすべて30年前から作品や名前を知っていた版画家達であったことだ。

院長の江豊は1931年に魯迅が上海で内山嘉吉を招いて催した木版画講習会に、杭州芸専の学生として参加した現代中国木刻界の最長老であり、堅実な手法で知られる古元は副院長であった。そのほか季樺、力群、王璃、彦涵など革命と抗日の戦いの中に現代中国木刻を完成させた元老達は版画科の教授であった。彼等は明るく謙虚であり、私の講義を学生に混って熱心に聴講していたことが

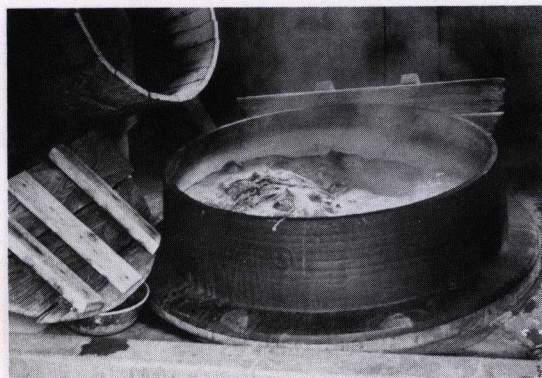
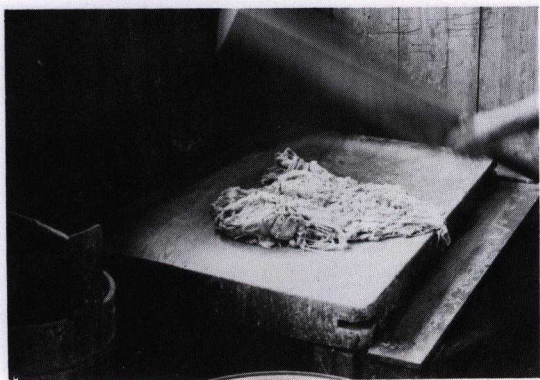
印象的であった。

学院の廊下には学生の版画が並べられていたが、ほとんど木版画で政治的内容の作品はなく、すべて自然のたたずまいや日常生活の中からの題材であり、小品のせいか日本の創作版画の初期のもののように素直に版の効果を楽しんでいるような印象をうけた。ただ描写力と構成力に勝れているためか、趣味的な世界に低迷した日本の初期創作版画とは違うと思った。

中国の学生は基礎教育として写生を十分にさせられるようだ。これは魯迅以来の写実精神が現在も受け継がれていることを物語っている。私は日本に居る時から中国の学生は人民公社などで労働の体験をしながら勉強をするということを聞いていたが、それは事実であった。私の講習が終わってから若い教員が付き添って農家に分宿し、労働に従事しながら絵を描きに行く計画があるという話しだった。しかしそれは私が考えていたような辛く苦しいものではなく、修学旅行のような楽しいもののようだ。

講習の最後に学生や版画家との懇談会があったが、彼等の大きな関心は外国の版画の現状であったが、外国文化の影響と自国の文化の独自性に就いても討論された。

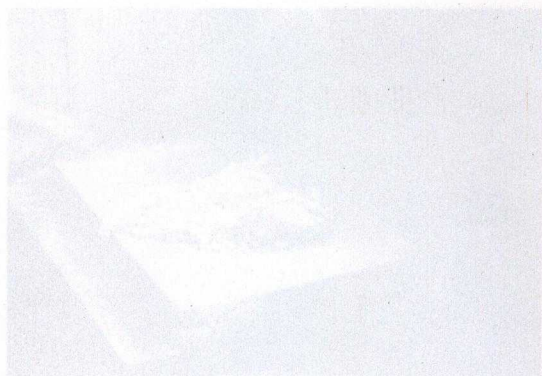
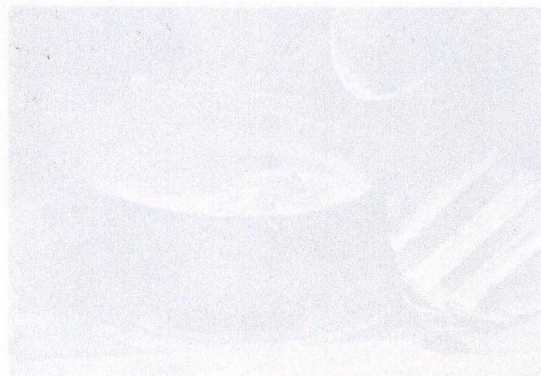
私を招いて日本の色彩木版の技術を学ぶという態度でも分るが、現在の中国は文革から解放されて外国の新しい文化を積極的に吸収しようとしている。中国の指導者達も版画が文化交流の最も身近な方法であることを知っている。私が北京を離れる時、中央美術学院の伍必端教授から学生同志の版画の交換展を提案された。私は技術水準も高くバリエーティに富んだ日本の学生の版画は、必ず中国の学生にも何等かの刺激を与えると思う。



昆布一夫さんの紙漉場を尋ねたのは、今年の4月4日であった。前日夜道の吉野山を車で登り中千本の民宿に着いたのは午後9時近かった。あわただしく入浴と食事をし翌日の準備をすまし、寝たのは深夜だった。吉野山よりさらに上流の国樺にこの紙漉村がある。出発の日から吉野に寄ろうか迷っていた。今回の予定地、美濃、今立、三保三隅、黒谷、美濃と2,000kmを越す旅程、十日間しか期日のない車での旅をいかに効率よく組立てるかが問題であった。場合によっては吉野と黒谷は飛ばす心づもりで3日前に千葉を出発していた。国道から細い急なコンクリートで固めた道を150m程登りつめた所に昆布一夫さんの住宅と紙漉場が山頂まで続く吉野杉の林を背にたっていた。家の前のコンクリートをうった100坪程の干場の先は段々畑が広がり、さらに国道を隔てて吉野川の溪流が左から右へ流れていた。約束の時間に少々遅れたが奥さんと若い夫婦が心よく出迎えてくれた。主人の一夫さんは河原で叩解した繊維の不純物を洗い流していた。さっそく河原へおりて行き、作業をしながら三栖紙系統の話を伺った。この作業は、流漉の工程、楮白皮のソーダ灰等の煮熟、ちり取り作業、繊維の叩解（紙出し作業）、漉き槽に紙料を入れ攪拌し、ねりを入れ、紙漉、紙床に湿紙を積み重ね、湿紙を圧搾し水分をとる、湿紙を乾燥し、仕上がる。の「紙出し作業に当る。昆布さんは「これをしねえと漆漉はできんのじゃ。」と言う。本流からひいた小川に落差をつくり、ブリキで作った筒を水出し口にし筒の廻りを小砂石で塞ぎ止め、水入れ口の手前にザルを伏せゴミの流入を防ぐ。水出し口の下を40cm程掘りさげ荒いザルを施置しその内に渋で固めた布を袋状に置き紙料を入れ、木製のヒシャクで良く攪拌しながら不純物を洗い出す。真冬には辛い仕事である。今週から吉野和良を漉く準備を始めたところであった。漉場

にもどると奥さんが三栖紙を漉いてくれるという。漉場は薄暗い。漉舟のあたりが浮いたように明るい。みあげると漉舟の真上の天窓から柔らかな光が入っていた。この漉場は特徴のあるものであった。湿紙の圧搾の工程を省き、直接松の干板に張りつける簀干をしていた。一枚の紙を漉くスピードは早い。この情景を谷崎潤一郎の小説吉野葛で次の様に表現している。「その板敷の上に十七、八になる娘がつくばいながら米の研ぎ汁のような色をした水の中へ両手を漬けて木の杵を篩ってはさっと掬い上げている。杵の中の白い水が、蒸籠のように作ってある簾の底へ紙の形に沈澱すると娘はそれを順繰りに板敷に並べては、やがてまた杵を水の中へ漬ける。」つくばいながら、というから当時はすわって漉いていた様である。米の研ぎ汁のような色というのは白土を紙料に混入しているからで、また板敷に並べては、簀干のことである。さらに、木の杵を篩ってはさっと掬い上げているは三栖紙を漉いているので吉野和良ではない。吉野和良は紙料を一度くむだけである。三栖は主に表具に使う。無形文化財指定の吉野和良は漆漉の紙である。ねりはトロロアオイをつかわず北海道産のザビタの皮からとる。このねりの違いを岩野市兵衛さんは、「酒にたとえろとザビタのねりは特級酒、トロロアオイは二級酒、うちでは2つをまぜ一級酒にして使っている。」と言う。サビタのねりを使うと特上の和紙が漉ける。簀は萱である。楮は高知産である。庭の隅で昆布さんが干板の修理をしていた。百年以上も使い込んだ松材の干板の節目や割れ目に和紙を置き渋を塗る。それだけで紙は板にしっかり接着する。

ふと時計をみると3時をまわっていた。長居を詫び、昆布さんのお宅を去った。車中で柿の葉寿司をほうばりながら次の目的地石見の三保三隅に向った。



シルクスクリーンのジアゾ感光乳剤と不完全ポヂ

岡部徳三

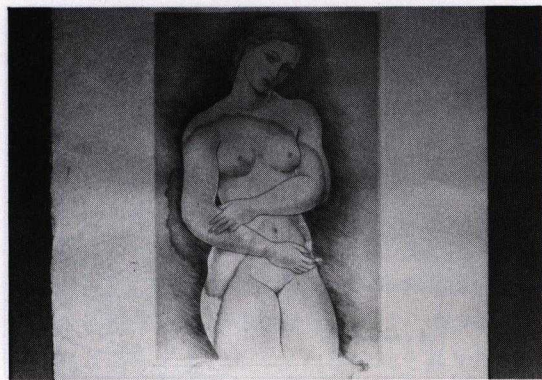
シルクスクリーンに限らないが写真製版の感光剤が重クロム酸塩類からジアゾニウム塩類に変わったのはそう古い話ではない。重クロム酸アンモン(またはカリ)の廃液に六価クロム塩が含まれるので浄化基準に触れるため、毒性の少ないジアゾ系の採用になったのである。ジアゾ系感光剤は重クロム酸系にくらべて感光進度が鈍く、したがって露光時間も長くなる。ここで面白いのは、鈍感になった感度を逆に利用する方法が考えられる。これから述べる方法は、いずれも版材として今日最も一般的なジアゾ系感光乳剤の直接法で、スクリーンへのコーティング(バケットによる塗布)は3~4度の一工程だけの薄い膜が適している。その理由は次に示す手工的なポヂが、いわゆる完べきなものではないために、露光時間を早めにきり上げる必要があるからである。厚い膜だと露光不足の結果ピンホールだらけの版になるか、膜が脱落してしまう。次にポヂの作例を示すと、

1. マットフィルム(半透明)にオペーク。従来のオペークによる手描きポヂは、透かしてみても光がもれるようでは駄目なものとして扱われてきた。しかし最近のテストではかなり水で薄く溶いて描いても、通常の露光時間の $\frac{1}{2}$ でできり上げれば、きれいに現像できることが分っている。もちろんこの場合も先に述べたように、コーティングが一工程だけの薄い膜の状態に限ってのことである。オペークを更に水で薄めて描いたもの、例えば水彩画のにじみのようなものでも、極端に薄いところは別として、それなりに現像ができるようになった。リト用の解墨を水で薄く溶き、フィルムへたっぷりせたあと、乾燥の次第で縞模様が残るリト特有な効果も、シルクスクリーンで表現できるようになったから面白い。このような微妙な版を作るにはメッシュ300位のテトロンかナイロンス

クリーンが適している。更にハレーション防止の着色スクリーンを使えば一層細かい版を得る。

2. ゼロックス(コピー)のポヂ。コピーに用いる紙は白く不透明だから、透明フィルムを支持体としているポヂの概念からは大巾に逸脱しているが、これに流動パラフィンをはけで塗布すればコピー紙も半透明になる。こうして得たポヂは通常の露光時間で鮮明な版となるのである。

さて、ここで分ったことはポヂの支持体は必ずしもフィルムに限らないということである。それならばトレーシングペーパーはもちろんのこと、薄洋、和紙の材質を利用して様々なテクスチャーで描き分けられるではないか。描画材としては鉛筆、ダートマトグラフ、リトクレヨン、マジックインキ、ロットリングなど遮光性を持つ色材ならなんでもよい。このような不完全なポヂに対する露光時間は、感光乳剤の膜厚やポヂの状態によって異なるが、紙類に描画するポヂは、フィルムにくらべて大きなハンディがあるから濃い目に描く必要がある。いずれにしても露光テストを行なって、適正時間を調べる必要がある。だが問題なのは、せっかく得た微細な調子の版も、インキの目詰りに見舞われてはなんにもならない。その救済法としては、乾燥の遅いインキを選ぶか、印刷のスピードアップを計る以外に手はない。乾燥の遅いインキには酸化重合タイプ(空気中の酸素と重合しながら硬化する)があり、その代表的なものは油絵具である。インキではプロカラー(江口孔版・東京)がこのタイプであるが、時にはリンシード油を加えたりして乾燥を遅らせる手段をとると、目詰りのトラブルは更に少なくなる。輸入品ではNAZDAR社の5,900シリーズ(アメリカ)のインキが優れている。



▲修復前

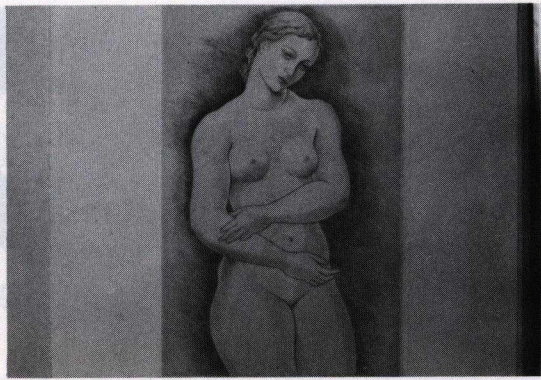
版画の保存に関して

近年まで版画を刷る素材としては、紙、ヴェラム・パーチメント以外略ぼ無ったといえます。広義に版画を解釈すると染色の型染も版画ですし、陶器、皮鞆工芸に版画の技法が活用されて居りますが、紙面の関係上、絵画ジャンルの版画として刷りに多用される紙の保存について幾分述べてみます。

製紙法が祭倫によって発明された当時は、魚網やボロ布などを混合、叩解して作られたとされていますが、現在紙の原料は多種多様を極め、麻、楮三桠のような韌皮繊維や木綿等のボロ布、針葉樹広葉樹からエスパルトや稲ワラまで、各種繊維を利用して作られています。これらの原料の違いが紙の保存強度と深い関係があるのはいうまでもないことです。因に、紙の変質、変色、強度と密接なつながりを持つリグニン⁷は針葉樹の場合で三桠の四倍から九倍程の含有率を持つとされています。また製紙の際ほどこされる表面サイズ、内面サイズの澱粉やCMC、填料として加えられる白土、タルク、石膏などは多い場合で30%にも及び紙の保存と大きく関係します。蓄水引きした場合の明礬の過剰な混入は紙を酸性化し脆弱にすることはすでに知られている通りです。

版画紙を選ぶとき印刷適性ととも紙質の純粋さも十分考慮されるのが良いと思われます。

アルシュは現在銅版画に最も多く使用されている紙と思われます。50年程前の、アルシュに刷られたピカソやミロの作品を見ましても保存状態は比較的良好であると思われます。但し雁皮刷りされたもの⁷の場合には、⁷紙とその接着剤が後にフォクシ（シミ）を多発させる直接の原因となりますので今後研究、改良されることが望まれる問題と思われます。

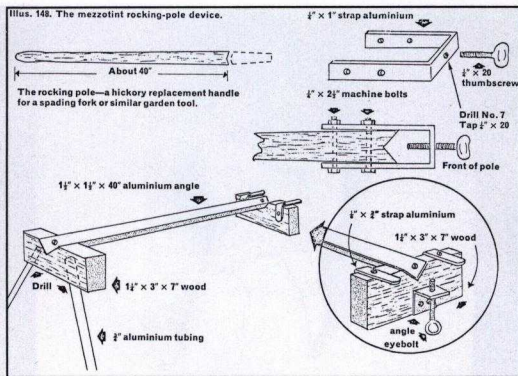
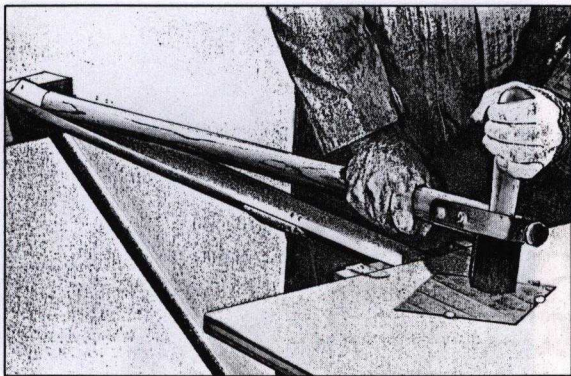


▲修復後

小林基輝

現在、各大学での学生作品の保管及び各個人のアトリエでの作品の保管はほとんどマップケースに挿入されている程度と思われます。マップケースが通気性の良い、湿気の少ない場所に接置されている場合には黴の発生、作品の彎曲等の問題は重大ではありませんが、湿度の高い場所にアトリエがある場合にはシリカゲルを多量にケースの中に入れて置くのが安全です。作品の保存に適した温度と相対湿度は国によって幾分異いがあり、イギリスの場合では相対湿度が72%以上、イタリアでは70~72%以上、スペインでは65%以上をこえると黴の発生やその他もろもろの弊害を派生させて危険であるとされています。わが国の場合は気温20℃、相対湿度55%位が適当のようです。シリカゲルを使用する場合、密封した容器内に入れ湿度50%、温度20℃で数日間安定させてから使用すると、湿度の高い場合吸湿作用をし、湿度が下ると放湿するので作品の保管には大変効果的です。黴やその他のバクテリアは植物繊維のセルローズを酸化させて脆弱にし、赤褐色のシミを作り出すことがあり、絵具の接着力の低下を促して剝離を引き起す原因にもなりますのでアトリエでの黴の発生防止には万全をほどこしたいものです。黴が発生した場合には軽く脱脂綿で除去し、通風の良い日影で十分乾燥させるのが良く、アルコールやホルマリンを脱脂綿につけて拭き取ると、時には絵具の褪色、変色を促し、シミを作ることにもなって危険です。貴重な作品の場合は専門の修復家に依頼すべきです。

最後につけ加えますと、サインは刷り上った紙が完全に乾いた状態で鉛筆か墨で行ない、サインペン、ボールペン、インクは十年位の短期間で褪色を起すので、ぜひ避けてほしいと思います。



Rocking

梅沢和雄

梅沢和雄

銅版に完全な均一のとれた目立をするために、油性のマジックインクで各方向に平行線を引き、それにそってロッキングしていくと、むらのない均一のとれた目立ができる。この時に平行線の間隔は1cm～1.5cmぐらいの線でロッキングしていくと時間的には多少かかるが、一方向でかなりの密度のある目立された面ができ上がり、最初の三か四方向目あたりまではそのまくれを気にせず、むしろその密度に注意していくようにしていく。それは、最初のまくれは回数をかさねていくたびにまくれがつぶされていく部分もあるので、銅版のまくれは後半以降から注意してロッキングしていくようにしている。

この時に銅版自体が手の力によって動いてしまい、片方のおさえながら目立するというのは不自由なので版の四辺を、柄がアクリルの鋏で固定してロッキングしていくと便利で、もう一つの方法は、四辺をガムテープで固定してしまうのもある。言うまでもなくプレートマークは後で切りおとすから作品サイズより多少大きめにとってあるのでそこを利用すればよい。これらの方法は目立を完全なものにするのと同時に、道具であるベルソーの歯の保護にもつながる。

ベルソーにロッキング棒を接続して使う考案は、古くから考えられていたようです。メゾチントは手で銅版にロッキングしていくと、一般版画家が必要な時間の上に精神的心の準備としての余裕がないととてもできるものではありません。この考案はまったく作家の手を必要としない訳ではありませんが、その負担を半分ぐらいにしてくれるというメリットがあり、直接、作家の手で目立していくよりも正確で安全である事はまちがいありません。しかし、その半面、目立は機械的になり、版画としてのおもしろみとか、その表現まで考え

ていくと、それをあつかう作家個人の考え方によらなければならないところが多分にあると思います。写真を見ていただければわかると思いますが、ロッキング棒の一方の先端とベルソーの歯が、水平上の面に二つの接点を組んで、手でさええなくても安定を保った状態で立っていなければなりません。そしてロッキング棒の一方の先端が支点になり、この棒を揺ると、その支点と同時にベルソーも前へ移動していきます。この支点の通り道を管状のアルミニウムでできたレールを机の延長上に引いてやり、銅版を机上にうまくセットしていけば正確で完全な目立ができます。

ロッキング棒とベルソーの接続部分は、図に示てありますから参考にして下さい。

(参考写真図はMANLY. BANISTER 著作の“銅版画の技法”より)

版画スクランブルについて

私の技法にかわり多角的にいろいろな問題を取り上げて掲載したいと思います。昨今石版の材料に関してもプロパー、製版インクなど業者の一方の理由で製造中止となったりしており、それらの問題も含めお互いが研究、工夫した事などできるかぎり情報交換できる場となれば会報のもつ意義も変わってくると思われます。今後はアンケートなどによりどんな事柄が必要か調査しながら進めていきますので皆様のご協力をお願いします。

今回は原稿メ切上身近な人に依頼したものを掲載しました。尚昨年秋の研究会主催の第1回講演—版画教室における防災と健康管理についても誌上講演の形で8号以降で掲載します。

弘前大から金沢大へ

今井治男

いつのまにか大学6枚余りの版画の授業にかかわる機会を持って来た。大変すぐれた制作を地方都市の中でもくもくとおこなっているところや、用具、機械を備えながら充分生かしきれないところもあったように思う。油絵が本道であるといった今日の絵画教育の中で、版画はまだ小さな位置しか与えられていないのが大部分の現状であろう。しかし授業をはじめてみると、ほんの少数であるけれど必ずといってよい程油絵をふり捨てて版画をやってみたいという学生がでてくるのは、版画というものの一性格を示しているようで面白い。小さな部屋のひと隅で熱心に版を彫り、インクにまみれる一ここに絵画を考える時、忘れてならない大切な何かがあるように思う。

今春から金沢に移籍したが、金沢は緑のよく似合う美しい街である。市の中心部にある校舎では、まず公害問題を明確にしてから授業にとりかかる必要を感じたりしている。

信州大から筑波大へ

白木俊之

全く突然、信州の山の中で教員養成の一環として「デザイン」を担当していた者が、筑波大のしかも畑違いの版画を担当する事になった。

私自身の版画とのつき合いは信州大着任後、まもなく、もう十余年になる。義務教育における「デザイン」は基礎造形訓練、あるいは造形実験的要素を含んでいる。いわゆるプリンティングの教材研究をしているうちに面白くなり、今日にいたるも大学では版画の授業は一度も持ったことがない。

今、筑波では大学院も含めて週六コマ、凸凹平孔すべての版式を一人で担当している。まったくのシロウトが……。ただただ空恐しく、なんでこんな大それた事を引き受けてしまったのかと今さらながらに冷汗の毎日である。

馬場章氏

芸大版画研究室を3月に退職し一般会員となりました。今後も別な形でご協力お願いします。

新会員

6月の例会で鳴剛氏(滋賀大学)、黒田 茂樹氏(東洋美術学校)、梅津薫氏(北海道教育大岩見分校)が新たに会員となりました。

“ヨーロッパ版画の旅”と題して版画家および研究者対象の旅行を東京芸大版画研究室で計画。期間は3月末から22日間。会員の参加もできる。

昭和55年5月22日。定例連絡会議に先だち、運営委員会が東京芸大に於て開かれる。

昭和55年6月13日、55年度第1回定例連絡会議が、日大芸術学部にて午後4時より開かれ、次の各項について協議した。新事務局長(野田哲也氏)より事務局移転について説明。続いて新会員鳴剛氏・梅沢和雄氏・黒田茂樹氏の紹介が行われた。

●会報について一

現編集責任者田村氏より、6号についての報告があり、カリキュラム問題も初期の目的を一応果たしたので、これからはもっと現場の声を載せてゆくような方向にしたいとの提案が出され協議された。

- 大学版画展のことをもう少しとり上げてゆく。
- 日本全国の版画材料取り扱い店をアンケートし、紹介する。
- 技法をコラム的に載せるようにする。
- 版画家の健康管理についての講演を収録する。
- 地方からの通信欄とニュースの欄を設ける。
- 小山松氏の和紙の研究発表。
- 興味ある大学への再度原稿依頼。

会報7号編集係に、小林基輝氏に加わることになった。

●大学版画展について一

参加校25校、場所は例年の通り大阪フォルム画廊。参加点数は約90点。専門大学6点、短期大学3点、各種学校2点と決まったが、九州産業大学は、5点出品を認める。

展覧会顧問は日大・小山松氏に決定。

名誉会員の承認。鎌谷氏より会計報告がなされた。

ポスターを各大学に分配。

▶ 大学版画研究会会則

第1章 総 則

- 第1条 本会は大学版画研究会と称する。
 第2条 本会は会員相互の協力により大学に於る版画教育の進歩発展をはかることを目的とする。
 第3条 本会の事務所は大学の版画研究室におく。

第2章 事 業

- 第4条 本会は第2条の目的を達成するために下記の事業を行なう。
 1. 機関誌、出版その他、研究調査に関する事業
 2. 研究協議会の開催
 3. 研究のための専門委員会または部会を設けることがある。
 4. その他本会の目的を達成するために必要な事業

第3章 会 員

- 第5条 本会は会員を似って組織する。
 第6条 会員は大学に於て版画教育にたづさわる者で入会の手続きを完了した者とする
 第7条 会員は別に定められた会費を納入しなければならない。

第4章 組織及び運営

- 第8条 本会の事業を運営するために次の役員をおく。
 1. 会 長 1 名
 2. 事務局長 1 名
 3. 運営委員 若干名
 第9条 会長は本会を代表する。
 第10条 事務局長は庶務、会計、事務を総括する。
 第11条 運営委員は事業、運営の企画を執行に当る。
 第12条 本会に名誉会員、相談役、顧問、賛助会員をおくことができる。
 第13条 役員は総会において選出する、任期は2年とし再任を妨げない。
 第14条 本会の会議は総会、運営委員会、専門委員会とする。
 1. 総会は年1回開き、本会の事業および運営に関する重要事項を審議決定する。会長は必要に応じて臨時総会を召集することができる。
 2. 専門委員会は内容に即して会長が召集し案件の作製、審議に当る。
 3. 運営委員会は会長が召集し、本会運営の企画に当る。

第5章 会 計

- 第15条 本会の経費は会費及び賛助会費をもってこれにあてて。

附 則

1. 第7条による会員の会費は年額2,000円とする。
 2. 運営のために必要な細則は別に定める。
 3. この会則は昭和49年11月3日よりこれを施行する。

▶ 会員名簿

- 阿部 浩 千代田区外神田2-18-7 武蔵野野大
 〒101 TEL 03-251-1474
 相笠昌義 座間市立野台540 女子美大
 〒228 TEL 0462-54-0279
 相沢美則 杉並区久我山5-1-22 文化学院
 〒168 TEL 03-334-9521
 秋元幸成 滋賀県大津市大谷町24-14 滋賀大学
 〒520 TEL 0775-25-7927
 有地好登 所沢市上安松221-1 日 大
 〒359 TEL 0429-44-6538
 東谷武美 埼玉県上福岡市駒林436-3 一 般
 〒356 TEL 0492-63-4779
 稲田年行 町田市三輪町1939 岐 阜 大
 〒194-01 TEL 044-988-3339
 今井治男 金沢市清川町4-10 エバーグリーン屋川405号 金 沢 大
 〒920 TEL 0762-44-5603
 伊東正吾 静岡市丸子7-8-6 造 形 大
 〒421-01
 梅津 薫 北海道岩見沢市志分本町3条6-110 志分住宅202-12 北海道教育大
 〒068 TEL 01262-4-1975
 梅津祐司 板橋区連沼7-7 ハスヌマアパルトマン 芸 大
 〒174 TEL 03-965-8918
 梅沢和雄 横浜市戸塚区平戸町1495 芸 大
 〒236 TEL 0458-22-1955
 小野克子 昭島市西武蔵野1388 女子美大
 〒196 TEL 0425-43-0891
 小作青史 世田谷区羽根木2-32-6 多摩美大
 〒159 TEL 03-321-7221
 小沼隆一郎 国分寺市本多1-10-21 札ノ丘荘102 武蔵野野大
 〒185 TEL 0423-25-5144
 小山松隆 千葉県習志野市袖ヶ浦2-6-4-506 日 大
 〒275 TEL 0474-74-6586
 大本 靖 札幌市中央区円山西町491 北海道教育大
 〒064 TEL 011-611-0722
 太田 広 神奈川県横浜市旭区鶴ヶ峰1-72-2 名古屋造短大
 〒236 TEL 045-371-2561
 岡部昌生 札幌郡広島町字西の里379-211 札幌大谷女子短大
 〒061-11
 岡部徳三 神奈川県秦野市渋沢158 芸 大
 〒236 TEL 0463-88-0743
 鎌谷伸一 横浜市金沢区平潟町31-1-814 芸 大
 〒236 TEL 045-781-1872
 神山泰治 那覇市首里石嶺町4-173-11 琉 球 大
 〒903
 河西万丈 山梨県大月市猿橋殿上483-1 都留文化大
 〒409-06 TEL 05542-2-6174
 河内成幸 多摩市桜ヶ丘4-26-33 多摩美大
 〒192-02 TEL 0423-71-4687
 加藤れい子 埼玉県狭山市入間川4-25-23 ハウス2008 女子美大
 〒350-13 TEL 0429-53-9174
 城所 祥 八玉子市本町35-6 武蔵野野大
 〒192 TEL 0426-22-5857
 北岡文雄 杉並区和泉2-27-8 武蔵野美術学園
 〒168 TEL 03-328-8361
 清塚紀子 板橋区幸町13-5 造 形 大
 〒173 TEL 03-955-2300
 木村秀樹 宇治市伊勢田町名木2-1-127 嵯峨短大
 〒611
 木村希八 鎌倉市山崎1350-4 一 般
 〒248 TEL 0467-45-2223
 小林清子 川崎市高津区野川4090の1 野川住宅2の403 女子美大
 〒213 TEL 044-751-0483

▶ 会員名簿

小林基輝 目黒区洗足2-25-17
〒152 TEL 03-781-9529 女子美大

糸野憲治郎 愛知県愛知郡長久手町長湫下権田104-1 茜荘14号
〒480-11 TEL 05616-2-0978 名古屋造形短大

黒田茂樹 横浜市金沢区六浦町303
〒236 TEL 045-781-4715 東洋美術

斎藤寿一 川崎市幸区塚越3-375
〒210 TEL 044-522-2007 和光大

酒井忠臣 福岡市東区松香台1-112
〒813 九州産業大学芸術学部

笹本 純 秋田県秋田市泉字嶽根166 三浦方
〒010 TEL 0188-33-5261 秋田大

坂田和之 静岡県藤枝市志太2-20-5
〒426 TEL 0546-43-5921 常葉短大

嶋 剛 大津市御陵町1-3 別所合同宿舍1011
〒520 滋賀大

清水昭八 小金井市梶野町4-16-27
〒184 TEL 0423-83-3733 武蔵野美大

島田章三 愛知県愛知郡長久手町芸大公舎J号
〒410-01 TEL 05616-2-0885 愛知芸大

白木俊之 茨城県桜村吾妻2-815-5
〒305 TEL 0298-52-0710 筑波大

園山晴己 世田谷区駒沢2-59-5
〒154 一般

田村文雄 小平市学園西町2-12-8
〒187 TEL 0423-43-7282 女子美大

武市 勝 山口市木町8-5
〒753 TEL 08392-8405 山口大

高橋貴和 宮城県名取市名取ヶ丘5-1-1
〒981-12 宮城大

滝沢光広 愛知県一宮市大和町代永1219
〒491 TEL 0586-44-3330 名古屋造形短大

津地威汎 徳島市徳島市吉野本町6-20-1 杉原マンション4号
〒770 徳島大

嶋野寿蔵 愛媛県伊予市瀬戸4丁目
〒799-21 一般

中林忠良 埼玉県上福岡市駒林437
〒356 TEL 0492-63-1970 芸大

野沢博行 刈谷市ヶ谷町広沢1 愛知教育大洲原寮17
〒448 TEL 0566-36-5895 愛知教育大美術教室

野田哲也 小金井市本町3-14-14
〒184 TEL 0423-81-9371 芸大

長谷川光輝 鎌倉市二階堂851
〒248 TEL 0467-25-1459 日大

馬場 章 浦和市道祖土381-4 長沢荘
〒336 TEL 0488-86-6307 一般

馬場禱男 横浜市金沢区富岡町1197-186
〒236 TEL 045-772-1770 造形大

浜西勝則 泰野市千村742-151-508
〒259-13 TEL 0463-87-3779 東海大

原 健 世田谷区野沢3-13-12
〒154 TEL 03-421-2980 造形・日大

平川晋吾 宇都宮市峰町350
〒150 宇都宮大

広畑正剛 世田谷区赤堤3-5-2
〒156 TEL 03-324-0532 玉川大

深沢幸雄 千葉市鶴舞308
〒290-04 TEL 043-688-2034 多摩美大

福岡奉彦 狭山市入間川4-25-23 ハウス2006
〒350-13 TEL 0429-53-7027 女子美大

吹田文明 世田谷区砧3-33-4
〒157 TEL 03-417-7123 多摩美大

深草廣平 佐賀市本庄町1
〒840 TEL 0952-24-5191 佐賀大

細田政義 世田谷区祖師ヶ谷3-39-8
〒157 TEL 03-482-3052 女子美大

堀井英男 八王子市宇津木町940-79
〒192 TEL 0426-45-3756 創形

前川 直 岩手県盛岡市茶畑1-1-6 グリーンビレッジ
C-411 〒192-03 岩手大

舞原克典 宇山市川田町1548-13
〒524 TEL 07758-3-0028 京都芸大

松川幸寛 狛江市戸北4-1-1 土屋方
〒201 TEL 03-488-4967 多摩美大

松浦 昇 岐阜県大垣市上面二丁提唐
〒503 大垣女子短大

松島順子 大田区田園調布4-29-25
〒145 TEL 03-721-3062 一般

松本 宏 神戸市東灘区渦森台3-19-7
〒658 TEL 078-841-7336 神戸大

丸山浩司 練馬区桜台6-8-13
〒176 TEL 03-992-4020 芸大

馬淵 聖 神奈川県茅ヶ崎市芹沢2511
〒253 TEL 0467-51-1497 女子美短大

皆川孝一 東久留米市神宝町1-8-8
〒180-03 日大

宮田克人 高知県高知市朝倉乙870
〒780 高知大

宮下登喜雄 府中市新町1-12
〒183 TEL 0423-61-5634 福岡教育大

村上文生 京都市右京区太秦原面影町6-1
〒616 嵯峨短大

望月詩子 西多摩郡五日市町伊奈810-4
〒190-01 TEL 0425-96-1215 一般

山野辺義雄 町田市広袴443-10
〒194-10 TEL 0427-34-5117 東海大

山本文彦 茨城県新治郡桜村天久保 芸術専門学郡内
〒300-31 筑波大

山本富章 愛知県愛知郡長久手町岩作三ヶ峰1-1 芸大第3住宅3-5
〒480-11 TEL 05616-2-7526 愛知芸大

横山貞二 小平市上水本町1282 二恭荘2号棟D号
〒187 一般

吉田 東 福岡市南区大字塩原226
〒815 TEL 092-541-1431 九州芸工大

吉原英雄 大阪府高槻市東五百住町3-21-32
〒569 TEL 0726-96-2286 京都芸大

吉田穂高 三鷹市井ノ頭1-13-40
〒181 TEL 0422-44-3923 女子美大

吉本 弘 愛知県愛知郡日進町岩崎元井ヶ7-197
〒470-01 TEL 05617-2-3565 愛知芸大

横田嘉雄 国分寺市本多4-17-6 ふじの荘6号
〒185 一般

渡辺達正 調布市上石原2-20-1 箕輪コーポ201号
〒182 TEL 0424-87-9476 多摩美大

渡辺 満 相模原市橋本5-25-5
〒229 多摩美大

渡辺明信 文京区向ヶ丘1-2-5
〒113 TEL 03-813-9050 文化学院

廖 修平 杉並区荻窪1-1-19
〒167 TEL 03-391-4554 筑波大

▶ 賛助会員名簿

新日本造形	中野区新井1-42-8 〒165 TEL 03-389-1221
サクラクレバス	千代田区神田三崎町3-1-16 〒101 TEL 03-263-4221
ヌーベルセンター	千代田区神田三崎町3-1-16 シブバビル内ヌーベル 〒101 TEL 03-262-4221
大阪フォルム画廊	中央区銀座6-3-2 ギャラリーセンタービル5階 〒104 TEL 03-571-0833
日本版画保存会	川崎市多摩区登戸3460 吉沢英哲方 〒214 TEL 044-911-9041
渡辺木版美術画舗	中央区銀座8-6-19 〒104 TEL 03-571-4684
山田商会	中央区八重洲5-5 〒104 TEL 03-281-1667・8538
レッドランタン版画舗	京都市東山区新門前通り仲之町236 〒605 TEL 075-561-6314
萩原市蔵商店	千代田区神田紺屋町43 〒101 TEL 03-256-3591
芸大画翠	台東区上野公園12-8 東京芸術大学内 〒100 TEL 03-821-7056
光村図書出版	品川区上大崎2-19-9 〒141 TEL 03-493-2111
ペンテル	千代田区東神田2-1-6 〒101 TEL 03-866-6161
マルチアートセンター (乃村工芸)	港区芝浦4-6-4 乃村工芸社 〒108 TEL 03-455-1171
ギャラリーカプセル	中央区銀座8-16-10B 401 堀江強志 〒104 TEL 03-541-4676
びけん(本店)	世田谷区尾山台3-33-5 〒158 TEL 03-702-2118
梶原商店	渋谷区上原2-33-8 〒151 TEL 03-466-6117
文房堂	千代田区神田神保町1-21 〒101 TEL 03-291-3441
日動画廊	中央区銀座5-3-16 〒104 TEL 03-571-2553
画荘ヴィナス	新宿区西新宿1-15-13 胖ビル内 〒160 TEL 03-346-2728
版画ギャラリー	京都市左京区熊野神社東入ル 京都ハンディクラフト・センター 6F 〒606 TEL 075-761-0345
画箋堂	京都市下京区河原町五条上ル 〒600 TEL 075-791-6131
クラタ商店	大阪市鶴見区茨田諸口町1118 〒538 TEL 06-911-6561
アート・コア・ 版画芸術工房	京都市中京区寺町通り三条下ル 一筋目東入ル 〒604 TEL 075-223-1760
酒井民雄	大垣市郭町3丁目 酒井書店 〒503
菊田商店	文京区本駒込3-8-2 〒113 TEL 03-821-7131
横田嘉雄	横浜市旭区金ガ谷781-13 〒241
武蔵野美術学園	武蔵野市吉祥寺東町3-3-7 〒180 TEL 0422-22-8171
シロタ画廊	中央区銀座7-10-8 高橋ビル地下1階 〒104 TEL 03-572-7971~2
養清堂画廊	中央区銀座5-5-15 〒104 TEL 03-571-2471
阿部出版版画芸術	目黒区上目黒4-30-12 〒153

(順不同)

▶ 編集後記

会報6号ができてからあまり時間がなくあわただしく、7号の原稿の執筆を依頼した先生方には早急な依頼にもかかわらずご協力いただきありがとうございました。会報7号は6月の例会の話し合いに沿った形で編集しました。メインテーマである大学における版画教育の問題と版画に関するあらゆる情報や消息などいろんな視野から取り上げていきたいと思います。情報収集などアンケート形式の方法も考えております。カリキュラムも今後も重点課題として第2段階にはいり会報を中心に研究を続けていかなければならない問題と思います。

なお、研究会、会報等にご意見がありましたら事務局までお寄せ下さい。

大学版画研究会 会報第7号 1980年7月
編集スタッフ一同

大学版画研究会 会報第7号 1980年7月

編集スタッフ 山野辺義雄／田村文雄／小林基輝
発行 大学版画研究会
印刷 新日本造形株式会社・有限会社 西川

文房堂の版画材料

(木版・銅版・石版)

資料をご請求下さい

東京都千代田区神田神保町 1-21 TEL (03) 291-3441 (代)

良い版材は良い地金

版画用・銅板・亜鉛板・リト用・ジंक板・アルミ板

有限会社 萩原市蔵商店

東京都千代田区神田紺屋町 43 番地

電話 東京 (256) 3591 番 (代表)

石版画用ジंक研磨

版画用材料専門店 クラタ商店

大阪市鶴見区茨田諸口町 1118

TEL 06-911-6561

株式会社 梶原商店

東京都渋谷区上原 2 丁目 33 番 8 号

電話 (466) 6117 (代表)

画材の専門店 ひびん

版画材料

●本店・世田谷区尾山台 3-33-5 ●多摩美術大学売店・八王子市鎌水 1723
TEL 702-2118 TEL 76-6636

●八王子市三崎町 2-13
TEL 25-5221

ペンてる
水彩 (不透明水彩)

CRAYON

ペンてる株式会社

画

翠

東京都台東区上野公園

芸術大学内 ☎ (821) 7056



サクラ版画絵具

株式会社 サクラクレパス

版画科 1 年修 石版・銅版・木版

武蔵野美術学園

武蔵野市吉祥寺東町 3-3-7

洋画・デザイン材料・額縁・石膏像・版画
株式会社 画荘 ヴィナス

本店 〒460 名古屋市中区新栄町 3-6
TEL <052> 961-0591 (代)
東京営業所 〒160 東京都新宿区西新宿 1 丁目 15-13
TEL <03> 346-2728 (胖ビル内)

現代版画

銀座ギャラリー

カプセル

〒104 東京都中央区銀座 8-16-10 B401
TEL 541-4676

創業 53 周年

日動画廊

東京都中央区銀座 7-4-12

電話 (571) 2553 (代表)



ヌーベルアーチスツ油絵具
ヌーベルエチュード油絵具
ヌーベル画用液
ヌーベルボスターカラー
ヌーベルドローイングインキ
ルフラン油絵具
ルフラン画用液
ラウニー画筆

SAKURA COLOR PRODUCTS CORP.

東京都千代田区三崎町 3-1-16 クレパビル 3 階ペンセンター
〒101 TEL 東京 03 (263) 4221 (代表)
大塚市東成区中道 1 丁目 10-17 サクラビル 3 階ペンセンター
〒337 TEL 大阪 06 (372) 1241 (代表)



養清堂画廊

中央区銀座 5-5-15 でんわ 571-2471

小・中・高一貫した教科書編集

光村図書出版株式会社

東京都品川区上大崎 2-19-9 TEL (493) 2111

<現代版画とマルチプル彫刻>

B 株式会社 乃村工藝社

マルチプル・アートセンター

東京都港区芝浦 4 丁目 6 番 4 号 / (03) 455-1171

大阪フォルム画廊

東京店 東京都中央区銀座6-3-2 ギャラリーセンタービル5階

TEL 03-571-0833

名古屋店 名古屋市中区新栄町1-1 明治生命ビル15階

TEL 052-962-5811

版画専門メーカー



新日本造形(株)

東京本社 〒165

東京都中野区新井1の42の8 TEL 03-389-1221

大阪支社 〒540

大阪市東区森ノ宮中央1の6の20 TEL 06-943-1141

日本版画保存会

川崎市多摩区登戸3460 吉沢英哲方

〒214

TEL. 044-911-9041

大学版画研究会

事務局 東京芸術大学版画研究室

〒110 東京都台東区上野公園内 TEL. 03 (828) 6111 (代) 内線337番